
とある魔術と科学の平行ワールド

コンキスタドル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術と科学の平行ワールド

【Nコード】

N2126J

【作者名】

コンキスタドル

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録二次創作です。

拙い文ですが、よろしくお願いします。

なお、時系列などではできるだけ一緒にしようと思いますが、多少変えるかもしれません。
ご了承ください。

主人公設定（前書き）

ネタバレがあるので第一章を読んでから見てください（一一）（

主人公設定

○峯山 謙介

【年齢】 16歳

【性別】 男

【体格】 中肉中背で、筋肉はある程度引き締まっている。身長は上条より少し高い。

【容姿】 髪型は長髪ではないが、少し長め。顔はそれなりに整っていてイケメンの部類には入っているけれど、自分で自覚はしていない。

【服装】 服装はほとんど学校指定の制服を着ているが、休日などはジャージを愛用している。夏はカッターシャツの下にTシャツ、冬は学ランの下にジャージを着ている。

【性格】 友情とかは大切にするタイプ。基本、優しい性格だがキレた時は歯止めがきかない。かなりの負けず嫌い。実は几帳面。

【能力】
アノウン
『解析不能』

解析不能という名前だが、まったく解析ができていないというわけではなく、

AIM拡散力場に干渉することによって他の人が使用する能力を使うことができる。

謙介本人の演算能力はかなり高いものだが、本人は演算を意識して能力を使っているのではなく、能力を使用するときに無意識に演算をしている。

しかし、これらは能力のほんの一部分らしく、本質に関してはまったく解析されていない。

学園都市の書庫^{バンク}には超能力者（レベル5）として登録されている。

現時点では超能力者（レベル5）の順位はつけられていない。

序章 『プロローグ』

ただ広いだけの何もない部屋のちょうど真ん中に円柱型の水槽がある。

「……………」

水槽の中に俺はいた。いつから、何のためにいるのかは分からない。

水槽の中では思い通りに動くことができず、呼吸もできない。かといって、どういう仕組みなのか分からないが別に苦しい訳でもない。

（……騒がしいな。何の音だ？）

人の声や銃声音、何かが燃える音に碎ける音など、普段水槽に付いている機械が動く音以外聞こえること自体が珍しいのだが、明らかに今起こっていることが異常だ、ということは分かった。

少し時間が経つと、いつの間にか水槽の機械音しか聞こえなくなっていた。

（どうなったんだ？）

そこまで興味があるわけではないが、やはり少しは気になる。

少しすると、この部屋と唯一外部との繋がりである大きな扉がゆっくりと開いた。

(……人か?)

扉から入ってきたのはいつもの白衣を着た研究員達ではなく、先頭に髪の毛が腰くらいまで伸びたスタイルのいい女性が一人と、その後ろに杖や剣を持った男の人が数人いる。

この集団の先頭にいるリーダーらしき女性を見たとき、初めて彼女を見るはずなのだが、そんな気はせず、むしろ逆に懐かしさを感じたぐらいだ。

「お前達はここで待っていてくれ」

先頭に立つ女性が口と手でそう指示する。

そして、こちらへゆっくりと近づいてきた。

(……ッ!?)

一瞬だった。

彼女の手には西洋の剣が握られおり、それを彼女は軽く振るうといとも簡単に水槽が割れ、中の水が四方八方へと飛び散る。そして水槽の中にいた俺自身はというと、いつの間にか彼女に抱きしめられていた。

(…………ッ!~!)

突然だったのですぐに体を離そうとしたがまったく体が言うことを聞いてくれない。

「……もう大丈夫よ」

彼女はゆっくりと唇を動かし、俺だけに聞こえるような小さい声で呟いた。

その一言でなぜか、体と心の両方が安心したかのように力が抜けていく。

(……温かい)

そういえば、人と触れたのって始めてかもしれない。

水槽の中では温度調整がされており、常に快適な温かさを保っているのだが、今感じた“温かさ”はそれとは違った今までに感じたことのない温かさだった。

「……………」

そして、無意識にゆっくりと目が閉じていき、いつの間にか意識がなくなっていた。

第一章『9月1日』前編

勢いよく教室の扉が開いた。

「はいはい、みんな席についてくださーいっ。始業式までにホームルームを始めちゃいますよー」

両手をパンパンと鳴らしながら入ってきたのは、見た目は完全に小学生でありながらこのクラスの担任であるという月詠小萌だ。

小萌が教壇に立つ頃にはクラスのみんなはすでに着席していて、静かになっていた。

「出席を取る前にクラスみんなにビッグニュースがありまーすっ」

クラスに少しざわめきが走る。

「今日からなんと転入生追加です!!」

おおお、と歓声が沸く。そんな中、クラスの一人である青髪ピアスが手を上げ質問した。

「先生ッ!! それは男子か女子か、どっちなんですか? それによつて盛り上がりが変わるんやけど……」

「残念ながら男の子ですっ。でもみんな驚くと思うのです!!」

一時的にざわめきがやみ、みんなの視線が今から開くであろう扉に

集中する。

「さあ転入生ちゃんどーぞー！！」

小萌先生の合図とともに扉が開き、見た目普通の男子高校生が入ってきた。

「え……あ、どーも」

「外部の学校から来たみねやまけんすけ峯山謙介くんです！！ みなさん仲良くしてやってくださいねー」

「……………」

クラス全体が静まり帰った。

女子は女子でグループを作りコソコソと話し出し、男子は男子で疑うような目で覗いてくる。

そんな中、また青髪ピアスがクラスの沈黙を破って小萌に質問した。

「先生ッ、いまなんて言いはったんですか？ 外部の学校？ そんな彼の何が凄いか教えてもらってもええですか？」

「はい、峯山ちゃんは外部の学校から来たのです」

学園都市では、小さい頃から外部から入ってくるのが普通であり、高校にもなって外部から入ってくるというのは、よほどのことがない限りありえないのだ。

「峯やーん。一緒にどっか寄っていかへん？」

……峯ちゃん？ 俺のことか？ まあいいけど、今日は確か……これから泊まることになる寮の入寮の手続きとかがあったよな。

「悪い、今日は寮の事とかがあって無理なんだ。また今度誘ってくれ」

青髪ピアスに軽く謝り、荷物を持って教室から出ようとしたとき、教室に残っていた小萌先生からお呼びがかかった。

「峯山ちゃーん、それと上条ちゃん、ちょっとこっち来てくださいなのです」

「……………？」

なんで呼ばれたんだろ……？ それに、上条？ 考えても無駄なんです。でとりあえず小萌先生のところに行くことにする。

「小萌先生、なんですか？」

小萌の近くに二人が寄ったあと、先に上条が質問した。

「上条ちゃんにお願いがあるのです。上条ちゃんの寮まで峯山ちゃんを送ってあげてくださいなのです。寮の管理人には連絡を通してあるので……」

上条はまったく嫌そうな顔をせず、すぐに承諾した。他の生徒と同じように上条本人も超能力者（レベル5）である謙介と話がしたか

ったのも確かだ。

「えっと……峯山だったっけ？ その……よろしくな」

上条は靴を履き替えながら軽く照れて言う。

「謙介でいいよ。前の学校で仲のいいやつはみんなそう呼んでたし……。よろしく」

謙介と上条はゆっくりと歩き始め、校舎から出た。すると校舎から出たすぐのところで男約10人程が明らかに待ち伏せしていた。

「お前が例の転校生か？ しかも超能力者（レベル5）らしいな」

真ん中に立っていた集団のリーダーらしき人物が話しかけてきた。

「（……誰？）」

謙介は上条に呟くように聞く。

「（一個歳上の金城先輩。この学校じゃ今のところ一番強い人かも……）」

「……ふーん」

謙介は軽く相づちを打ち、そして上条を置いて前へ歩き出した。

「おっ！？ 超能力者（レベル5）、やる気なのか？」

金城は身構えた。

しかし謙介はそれをスルーして金城を通り過ぎていく。

「当麻ー早く来いよっ」

なにもなかったかのように振り返り上条を呼ぶ。

「えっ！？ あ……おう」

上条は小走りで謙介の元へ寄っていく。

「……おい！！ 無視してんじゃあねえぞ！！」

金城は自身の能力——パイロキニクス発火能力を使い、サッカーボール程の大きさの火の玉を作り上げ、謙介に向けて放った。

「おい！！ 謙介ッ……？」

上条が謙介に、金城から攻撃されていることを忠告しようとしたとき、上条は見た。謙介の顔にほんの少しだが笑みが浮かんでいたことに。

火の玉はそれほど速くはなかったが、謙介へと一直線に進んでいき、金城と謙介のちょうど間くらいの位置に火の玉が来たとき、やっと謙介は動作を起こした。

「……ッ!!」

謙介は金城と火の玉の方向へ振り返り、右手の手のひらを突き出した。

すると謙介の手のひらからは金城の出した火の玉と同じ……いや、大きさはそれ以上で、半径1メートルくらいありそうな火の玉というより炎の塊を出した。

「なッ!？」

炎の塊は金城の出した火の玉を飲み込み、そのまま一直線に金城へと向かって進む。

金城は瞬時に悟った。

格が違^{レベル}い過ぎると……。

金城は完全に折れ、ガードの体勢すら取れなかった。

「……………」

謙介は突き出している右手を下げ、笑みを浮かべながら振り返り、ゆっくりと歩き始めた。

すると、炎の塊は金城達に当たる直前で弾け飛び、消え去った。

上条を含めた周りで見ていた生徒達は呆気にとられ、辺りは沈黙し

ている。

そんな中で沈黙を破ったのは謙介だった。

「おーい、当麻。早く行こうぜ」

謙介と上条は校門を出て、寮へと向かった。

「いったいどういうことだ？」

「……………」

緑色の手術衣を着ていて、赤い液体に満たされた巨大な円筒器の中に逆さまで浸かっている人間——アレイスター・クロウリーがゆっくりと目を開け、目の前にいる金髪頭にサングラスをかけた土御門をしっかりと見据えて言う。

「彼は少し前の失敗した計画で主軸だった人間だよ……。今の計画にはまったく組み込まれていないただの学生だよ」

「ただの学生が学園都市に来て早々超能力者（レベル5）になれる訳がないだろ……。あいつは……。いったい何者なんだ？」

土御門は堅い顔のまま人を脅すような口調で質問を続ける。

「……彼は『魔術師』『能力者』『聖人』『原石』『絶対能力者（

レベル6)』『魔神』『SYSTEM』『天使』『神』『最強』『
最弱』、の全てだよ。ただそれだけのことだ」

「……は？」

「……………」

アレキスターは完全に口を閉ざした。

「……これ以上話す気はない、ってか？」

男にも女にも、子供にも大人にも、聖人にも囚人にも見える人間が
微かに笑みを浮かべた。

土御門はそれを見たあと振り返り、暗闇の中に消えていった。

第一章『9月1日』前編（後書き）

本当にお待たせしました。

これからも応援よろしくお願いします。

感想待っています！

第一章『9月1日』後編

「……誰？」

謙介は目の前にいる茶髪の少女を見て言う。

「アンタこそ誰よ？」

少女も腕を組んで言い返す。

「お前から言えよ!!」

「アンタから言いなさいよ!!」

なぜこんな同じことの言い合いをしている状況になっているか、という時は5分前にさかのぼることになる。

「寮まであとどんくらいかかんの？」

「もう少しかかると思……う、ゲッ!？」

上条は嫌なものを見たかのような渋い顔をして頭を抱え込み、しゃがみこんだ。

「どうしたんだ？ 当麻……」

「……不幸だ」

前方から歩いて来た少女は、学園都市230万人の頂点に立つ、8人の超能力者（レベル5）の第三位である御坂美琴だった。

「ん？ あ、アンタ……いつもいつも私から逃げて、今日という今日は決着をつけてやるんだからっ!!」

「はぁ〜」

上条は大きく溜め息をついたあとゆっくりと立ち上がり、謙介と向かい合い、

「謙介……」

「ん？」

深刻な顔つきで話を続ける上条。

「悪い……。あとは任した」

「はい？ っておい、どこに行くんだよ!？」

上条は謙介の言葉を聞く前に全速力でこの場から立ち去った。

「……………」

そして今に当たる。

「はぁ……」

「そこ、溜め息つかないっ!!」

「……はいはい、分かったよ。俺から言えばいいんだろ？ 俺の名前は峯山謙介、当麻とはクラスメートなんだ。……で、お前は？」

美琴を指差しながら早口で言う。

急で驚いたのか、美琴は慌てながら視線を謙介から離しながら答える。

「あ、あたしっ!？ 私は常盤台中学2年の御坂美こ——」

突然、謙介の携帯が震えた。

「わ、悪い。電話がかかってきた。……もしもし？」

「……………」

美琴はワナワナと小刻みに震えながら下を向く。そして、拳を強く握り、謙介に向けて大声で言い放った。

「私を無視すんなーっ!!」

同時に美琴の体から電撃が四方八方へと飛び散ったが、謙介は体を大きく捻ってなんとか回避した。

しかし、電気製品である謙介の携帯は煙を出して、最後はボンツ、という音を出して壊れた。

「つぶねーな、なんだよ今の？　って携帯潰れてるし、何者だよオマエッ！！」

「……っさいわね、アンタこそなに人様を普通に無視してんのよ！！」

「だから電話って言っただろ！！」

謙介と美琴の両者の口撃は段々とヒートアップしていく。

「あーもういいっ！！　勝負よ、勝負しなさい！！」

「ああ、望むところだよッ！！」

「ほんとに良いんだな？」

「アンタこそ、あとからでも許してもらえんのか思ってたんなら大間違いよ」

美琴はポケットからゲーセンなんかでよく見るコインを取り出して、指で弾くようなポーズを取る。

「一応忠告しとくわ。アンタ、避けないと死ぬわよ？」

「はい!？」

瞬間、美琴は親指でコインを弾いた。だが、それは謙介の横をものすごい勢いで通り過ぎていく。

「ッ!!」

さっきのは、謙介が避けたというより、美琴がわざと外したのだった。

しかし、余波によって謙介の体は宙に浮き、3メートル程の高さまで上がった。

「今のは超電磁砲レールガンって言うんだけど、他にもこんなこともできん
よッ!!」

美琴は能力で自分の周りから砂鉄を一ヶ所に集めた。

その砂鉄の塊にはビリビリ、と電気が走っている。

（ん？砂鉄に電気が走ってる……さっきのも電気を帯びてたし、こ
いつは発電能力者かなにかなのか？）
エレクトロマスター

そう考えてるうちに美琴は容赦なく、野球ボール程の大きさがある砂鉄の塊を宙に浮いている謙介に向けて飛ばしてきた。

「うおッ!？」

最初の一発目は横に逸れ、外れた。だが、すぐに美琴は次の砂鉄の塊を用意する。

「次は当てるわよッ!!」

もう一度美琴は砂鉄の塊を放った。

「くッ!!」

謙介は顔の前で両腕をクロスさせ、顔を守るようにガードした。

しかし、砂鉄の塊は謙介に当たる直前でガードを避けるように四方八方へとバラバラになりながら飛び散り、謙介を囲った。

（やばっ、これは……避けられねえ……）

美琴は不適な笑みを浮かべた。完全に自分が勝ったと思ったのだろう。しかし、美琴の思うようにはいかなかった。

「ッ!? コントロール……がきかないっ?」

謙介を囲っている砂鉄が美琴の思い通りに動かなくなっていた。

「なかなか難しいんだな……これ」

囲っていた砂鉄はだんだんと絨毯みたいな形になり、謙介を乗せてゆっくりと下降していく。

（まさか……あいつも発電系の能力者なの? いや、だとしても私

以上なわけ……)

美琴が謙介の能力について考えている間にすでに謙介は地面に降りていた。

「この程度なのか？ 大口叩いてる割に、思ったよりショボいんだな……」

謙介は美琴を挑発するように頭をポリポリと掻きながら言う。

それに対して美琴は完全にぶちギレた。

「あーそう。手加減してやってるっていうのに……。アンタ、もう知らないわよ？」

美琴の体からは電気が漏れ、逆にそれがオーラみたいなのを形成している。

「最初からそうしろよ」

謙介がそう呟いた瞬間、空は晴天だというのに雷が美琴へ落ちた。

「えっ？」

「へー、相手の心配してる余裕があるんだ……。だったら、死んでも知らないからッ!!」

美琴は電撃の槍を謙介へ向かって放った。

危険を察知した謙介はすぐに砂鉄で大きな盾を作ったが、いとも簡

単に電撃の槍に壊されてしまう。だが、砂鉄の盾に当たったことで電撃の槍の軌道が逸れ、謙介には当たらなかった。

「危ね……、ってマジかよ!?!」

謙介が驚いた理由は、美琴がさっきまでは持っていなかった真つ黒の剣を持っていたからだ。

「砂鉄が振動してチェーンソーみたいになってるから、触れるとちよーっと血が出たりするかもね。まあアンタには関係ないでしょうけどッ!?!」

電撃の槍からあまり間を空けず、すぐに次の攻撃を仕掛けてきた。

「くッ!! それは無しだろ!!」

すぐにもう一度砂鉄の盾を作るが、砂鉄の剣は紙を切るかのよう、いとも簡単に盾を斬り裂いた。

続けて美琴が謙介を斬りかかろうと砂鉄の剣を大きく振りかぶった。

「うおおおおお!!」

その隙に謙介は美琴の方へと突っ込んだ。衝突した衝撃で美琴は砂鉄の剣を手放してしまった。

「えっ!?! ちょっと!?!」

そしてそのまま、謙介は美琴を押し倒した。

その急な出来事に美琴は困惑した。

「あ、アンタ……離さないよ!!」

美琴は顔を真っ赤にしながら両手で謙介の胸を押して、必死に訴える。

（こうなったら直接電気を流してやるっ!!）

美琴は謙介を抱くようにしがみついた。

（くらえッッッ!!）

「……………おい。お前、なにしてるんだ？」

謙介は少し顔を赤く染めながら聞く。それなりに可愛い女の子に抱きつかれて何の反応もない方がおかしいだろう。

「えっ？」

（こいつ……電気は流れているのに……なんでくらわなのよ？
……………やっぱり発電能力者なの？）

「おい、そろそろ離してくれないかな？」

美琴はやっと謙介の声が聞こえたらしく、耳を傾けると同時に今の自分の状況に気付いた。

「へ？　な……は、離れなさいよアンタッ!!」

謙介の胸を押して、そこから抜け出した。

「ハアハア……アンタ、いったい何者なの？ なんの能力をもっているのよ？」

美琴は肩を上下させながら謙介を睨んで問う。

「……なんだろうな？」

謙介はゆっくりと立ち上がりながら言う。

「は？ こっちが聞きたいわよっ！！」

思いもよらない返答に美琴は攻撃的になってしまう。

「――『デュアルスキル多重能力』とか色々言われてるけど、実際は違う」

「デュアルスキル多重能力？ あれって……人間の構造上できないんじゃないの？」

「だから、違うって言ってる。俺の能力は『解析不能』って言うんだけど……」

謙介は頭をボリボリと掻きながら続ける。

「口で説明するのが難しい能力だよ」

「ってことはアンタは別に発電系の能力者ってわけではないの？」

「ああ……」

謙介は適当に相づちを打ちながら振り返り、歩き始めた。

「んじゃ勝負は俺の勝ちで終わりってことで……」

「ちょっ!?! 待ちなさいよッ!!」

美琴は反射的に電撃を謙介に向けて放出する。それに対して謙介は電撃にぶつけるように炎の玉を出して応戦した。

電撃と炎の玉がぶつかり、辺りに爆煙が広がった。

「炎? デュアルスキル 多重能力……?」

「だから違うって……」

謙介はそう言い残して爆煙に隠れながらこの場から立ち去った。

「アイツは……何者なの?」

学園都市第七学区のとある歩道に謙介はいた。

「……………」

そろそろ日が沈みかけてきた頃だ。

「はぁ……」

大きく溜め息をつきながら歩き続ける。

「まったく、当麻のやつ……」

謙介は快晴な夕空へ向かって叫んだ。

「寮はいったいどこにあるんだよーッ！！」

第一章『9月1日』後編（後書き）

感想待っています！

第二章『禁書目録』前編

学園都市へ来てもう結構経つ。

ここでの生活はだいぶ慣れてきたし、クラスの雰囲気とか友達のこととかもだんだんと分かってきた。分かってきたんだけど……、

「ねえとうまとうま、けんすけがいるということは今日はご馳走なのかな？」

インデックスは目をキラキラと光らせて言う。

「ああ、今日は鍋パーティーだインデックス」

鍋をテーブルの上にセットしながら上条はインデックスの問いに答える。

「この二人の関係はいったいなんなんですか？」

謙介は上条とインデックスを見ながら小さな声で呟いた。

「謙介、何か言った？」
けんすけ

上条とインデックスの二人は口を揃えて同じことを言う。

「いや、独り言だよ……」

ちなみに今日は上条家にお邪魔している。今からここで夜ご飯を頂く予定だ。こっちの寮に来てからは週に1，2回くらいのペースで

一緒に夜ご飯を食べている。

「……そういえば当麻、明日の補習ってかかっていたっけ？」

謙介は食器をテーブルに並べている上条を向けて問う。

「あ……」

上条は一瞬、手に持っている食器を落としそうになったが、慣れているのか、ギリギリでなんとか受け止め、耐えた。

「ねえとうま、もしかして明日は日曜日だっていうのに学校に行ったりしないよね？」

何度か経験があるのか、ハッ！？と何かに気付いたインデックスが鬼の形相を浮かべながら上条を問いただす。

「いやあ、それは……その、なんというか……えーと、インデックスさん？」

「とおーうまあー？」

言い訳をしようとした上条にインデックスは容赦なく、ジリジリとゆっくり近づいていく。そして尖った歯を上条に見せた。

「おーいスフィンクスーっ」

後ろで聞こえる上条の悲鳴を無視して謙介は上条家の一員である猫のスフィンクスを呼ぶ。

「にゃー？」

謙介の声に反応したスフィンクスは小走りですぐに謙介のもとに駆け寄った。

「ほら、お前の分の飯だぞ。たくさん食べろよ」

スフィンクスの頭を撫でながら開けた缶詰を用意する。

「にゃー」

スフィンクスは勢いよく食いつく。それを確認した謙介はスフィンクスから視線を外し、上条とインデックスがいる方へ向いた。

「んで、どうするんだ？　なんだったら俺、日曜暇だからインデックスの昼飯、どっかに連れていこうか？」

インデックスが上条の頭に噛みついる光景はここ数週間で慣れた光景なので謙介はあえてそこはなにも言わずに話を元に戻す。

「あゝ、そんじゃ頼むわ。別にいいかインデックス？」

上条は頭に噛みついていいるインデックスに聞く。

「フガフガ……フグギフガフ※\$¥@☆▽〒◇▽℃」

「いやインデックス、なに言ってるかぜんっぜん分かんねえから……」

謙介は頭をボリボリと掻きながら呟くように小さな声で言った。

——日曜日。

予定通り、謙介とインデックスは昼飯を食べに地下街へ来ていた。

「なあ、インデックス。何が食べたいとか要望はあるか？」

「うーん、あれもいいし、こっちも美味しそうだし、いやあれなんかも……」

インデックスは目を輝かせながらキョロキョロと辺りの店を見ている。そして何かを思いついたのか、謙介の方に勢いよく振り返り、言い出した。

「ねえけんすけ、この辺一帯のお店、全部食べ歩くっていうのはど

——」

「いや、やらねえよ!!　　ってか、お前が言ったらリアルに聞こえるからやめてくれっ!!」

インデックスは口を膨らまし、何も言わずに視線を謙介からそらした。

（はあ……当麻も大変だな）

謙介は頭をボリボリ掻きながらポケットから携帯を取り出して開き、時間を確認する。

「まだ10時か……早いな」

昼飯を食べる時間としてはだいぶ早い、というかどちらかというと朝飯に近い。

なぜこんなに早いかというと、9時30分頃の謙介が寝ているところを腹が減ったからといってインデックスに起こされたのだからだ。ちなみに上条とは補習が終わってからどこか待ち合わせし、合流するつもりだ。

（とりあえずどっかで当麻が来るまで食べながらも時間を潰すか……）

謙介は辺りを見渡し、高級料理店を除く店舗を探した。地下街の一部に高級料理店が密集しているところがあるのだが、謙介はそれがどこにあるのか知らないので間違って入らないように一応確認した。幸運なことに、有名な全国チェーン店がここら一帯にズラリと並んでいた。

（おお……良かった。それにしても、馴染みのある店を見かけるとなんだか落ち着くなあ）

ひとまず謙介は一息ついて、店を見て回ろうとしたとき、インデックスは珍しく食べることから違うことに興味がそれていた。

「ねえけんすけけんすけ、あれ何ていうのか知ってる？」

インデックスは謙介の服の裾をクイクイと引っ張り、もう片方の手ですぐ近くにある機械を指差しながら得意気に胸を張って語り始めた。

「あれって『ぷりくら』って言うんだよ。けんすけ知ってた？」

「……いや、知ってるけど」

疑問を浮かべながら謙介はインデックスの問いに答える。

それに続けてインデックスは口を動かした。

「1ヶ月くらい前だけどひょうかと一緒にカナミンのドレスを来て撮ったことがあるんだよ。……今頃ひょうかはなにしてるのかな？」

インデックスはプリクラを撮る機械を見ながら寂しそうな顔をする。

「そのひょうかかってやつはお前の友達かなにかなのか？」

待ってました、と言わんばかりの笑顔を浮かべながらインデックスは振り向いた。

「ひょうかはわたしととうまの親友なんだよ。最近は事情があっただけで、でもひょうかと喧嘩したとかじゃなくって……」

「あー分かった分かった。そのひょうかかってやつはお前と当麻の友達。んでもって事情があっただけで最近では会えてない。そうだろう？」

謙介はインデックスの話を途中で止め、分かったということを確認することではほとんど投げやりにアピールする。

「うん、そうかも……」

インデックスは少し驚いたような仕草をしてから視線をプリクラ機に戻した。

そして、そのまま少し時間を空けたあと、不意にインデックスは小さな声で話しはじめた。

「ねえけんすけ……」

「ん？」

間を置いてからインデックスは話し続ける。

「一緒にぷりくら撮ろ」

インデックスは満面の笑みを浮かべながら言う。

「……………え？」

「結局、彼のことは何か分かったのか？」

「いんや、今のところ進展はなしって言ったところかにゃー」

「チッ、上条当麻はいったいなにをしている？」

赤髪で長身の神父は舌打ちをしたあと、金髪にサングラスをした少年へ問う。

「なにをそんなに苛立ってるんぜよ、ステイル」

「なんでもないっ！！　ただ、あの子をほったらかしにして上条当麻はなにをやっているのか、と思ったただけだ」

「ふっ……」

金髪にサングラスをかけた少年——土御門はこらえきれずに笑いをこぼした。

「なにがおかしい、土御門っ！！」

軽く赤面するステイル。

「なんでもないにゃー。それよりどうするんだ？」

「直接会って確かめる。人払いをするから土御門はその外で待機していてくれ」

そう言うときステイルは胸ぐらから数枚のカードを取り出して、その辺に散らばせた。

第二章『禁書目録』前編（後書き）

テストなどあり、遅くなりました。

次話は今週中に更新できるよう頑張ります！

話は変わりますが、地震が凄いらしいですね。

少しでも多くの命が助かることを祈ってます！

それでは。

第二章『禁書目録』中編

「いや、別にいいけどさ……」

謙介は頭をボリボリと掻きながら小さな声で言う。

「あ、でもコスプレとかはしないぞ？　それはいいな、インデックス」

「うん」

インデックスは後ろに♪（音符）が付きそうな声で承諾する。

「はぁ……」

謙介は下を向きながらため息をついていると、後ろから聞き慣れた声で声をかけられた。

「アンタ、いったい何をやってるのよ？」

振り返るとそこには御坂美琴がいた。

「……………当麻じゃないけど、不幸だ……」

最近口癖になりつつある。上条のが移ったかもしれない。

「ねえ短髪、短髪こそいったいなにをしてるの？」

「べ、別に……偶然この辺をうろうろしてただけよ。アンタこそ今

日はあのバカとじゃなく、なんでこいつと一緒にいるのよ？」

美琴は謙介を指差して言う。

「誰と一緒にいたって私の勝手なんだよ。それとも短髪は私達と一緒ににいたいっていうのかな？」

インデックスは美琴を挑発するような声で言う。それに対して美琴は慌てながら言い返す。

「そんなわけないでしょ！ アンタはともかく、なんで私がこんなやつと！」

美琴は赤面しながらもう一度謙介を指差し、慌てて言う。

(……俺、嫌われることしたっけ？)

二人の言い合いを見ながら謙介は携帯を開いて時間を確認する。

(まだぜんぜん経ってねえな……)

小さくため息をついたあと、二人の間に言い合いに割り込んで入った。

「なあインデックス、この辺にしといて早くプリクラ撮ろーぜ。なんなら御坂も一緒に撮るか？」

ついでに美琴にも誘ってみる。

「えっ！？ わ、私？」

美琴は突然の誘いに驚き、自分を指差して確かめる。

「お前以外に誰がいるんだよ……。先に行ってるから来るなら来いよ」

そう言い放ってインデックスと一緒にプリクラ機の方へ歩き出す。後ろで美琴がブツブツと文句を言っているがなんだかんだでついてきていた。

プリクラ機の中では左からインデックス、謙介、美琴の順で並んでいた。

『顔と体を寄せあって飛びっきりの笑顔をしようっ！』

「はいっ？」

プリクラ機から出る可愛い声の注文は人によるかもしれないが、少なくとも謙介には彼氏彼女の関係ですらない二人を寄せあうなんてことはなかなか難しいものであった。

『準備は出来たかな？ 3……2……』

インデックスは普通に笑顔で寄ってきている。さほど気にはしていないようだ。しかし、美琴の方はそうはいかなかった。

「……………ッ」

たった400円。されど400円。謙介はその400円のため（謙介が払った）に何かのスイッチが入った。

「ちくしょう、金払って撮るからには無駄にはしたくねえ！」

プリクラ機から出る声の2から1の間に謙介は、インデックスと美琴の謙介からして奥の方の肩を掴んでグッと引き寄せた。

「えっ、ちょっ……アンタ顔近づけ過ぎっ！」

美琴を無視して、謙介は問答無用で言う。

「笑えインデックス、御坂っ！」

『1、はくいチーズ』

カシャツ、とシャッター音が鳴る。

「あー、やっと終わった」

首をコキコキと曲げて音を鳴らしながらボソツと呟く。

「アンタ、なに人の顔にスタンプばっかつけてるのよ」

「短髪こそ、私の顔を塗り潰してるのは気のせいかな？」

プリクラの落書きに夢中のインデックスと美琴は、なにやらまた言い争っているようだ。

「なんかドツと疲れが出てきた。まだ時間かかるだろうからトイレにでも行くかな……」

謙介はその様子を少し見たあと、ため息混じりに呟いて、頭を掻きながらその場を離れた。

「なんだかんだいってあいつら結構仲が良いんだよな。なんかほんとに疲れたわ……。あれ？」

トイレへ向かう途中、独り言を言っていたらふとした疑問が謙介の頭に浮かんだ。

（あれ？ 今の時間帯に人がまったくいないのは珍しいな……。なにかあったのか？）

周り一帯を一度見渡すが、人影がまったくない。ある意味不気味な光景だった。

「峯山謙介……だね？」

「……誰だ!？」

いつの間にか、背後のすぐそこまで赤髪の神父姿をした青年に近寄られていた。それなりに人間の気配とかに敏感と自負していた謙介は、まったく気配を感じられなかったことに驚いていた。

「ステイル、ステイルⅡマグヌス。まあ名乗るほどの者ではないけどね。……別に殺しに来たわけではないから魔法名は言わないでお願い」

冷静に話しているように聞こえるが、表情には怒りや嫉妬に近いモノが出たり隠れたりしている。

「魔法名……？ いったいお前は何者なんだ？」

「……君をちょっと試させてもらう」

「はいっ！？ てか質問に答えろよ！」

ステイルは謙介を無視して、何十枚にも及ぶルーンのカードを取り出して周辺に散らばせた。そのあとステイルは謙介に背後を見せてその場を離れようとする。

「おいっ！ えっと……ステイ」

謙介はステイルを追いかけようとした瞬間、轟ッという大きな音と共にステイルが置いたルーンのカードの辺りから炎でできた巨人が現れた。

「ッ！？ なんだこれは？」

イノケンティウス
「魔女狩りの王。君には小手比べは無しだ」

スタイルは少し離れた位置で振り返り、謙介に向けて言い放つ。その瞬間、魔女狩りの王は謙介の方へと歩き始めた。

「いったいあのバカはどこにいったのよ！」

「短髪、さっきからちよつとうるさいかも。けんすけのことだからトイレにでも行ってるんじゃないかな」

インデックスはプリントしたプリクラを眺めながら言う。

「そうだとしても、普通なにも言わないで行かないでしょ？」

「あっ!？」

インデックスからプリクラを取り上げて、手際よく三等分に切って分けていく美琴。

「はぁ、私は別に一緒に撮りたいなんて言っていないのに……なにやつてるんだろ」

「自分から来てたくせに……」

ボソッとインデックスは遠くを見ながら呟く。

「そ、それはアイツが無理やり誘うからっ！ 別に私は……ってア
ンタ私の話聞きなさいよっ！」

インデックスは完全に美琴を無視してキョロキョロと辺りを見渡し
ている。

「……………魔術的効力を感じる。近くで魔術の力が使われてるかも。
これは…………ルーン？」

「は！？ アンタなに言ってるのよ？」

「行かなきゃ…………」

インデックスはそう呟くと、その場から離れるように走り出した。

「えっ！？ どこに行くのよ？」

第二章『禁書目録』中編（後書き）

遅くなりました。

これからよろしくお願いします！

第二章『禁書目録』後編（前書き）

遅くなりました。

もう高3なので受験勉強などに時間を取られて、どうしても更新は遅くなるかもしれませんが、一応続ける予定なのでこれからもどうかよろしくおねがいします！

第二章『禁書目録』後編

「くッ……」

謙介は横に転がって魔女狩りの王の攻撃をなんとか避ける。
イノケンティウス

（あれはどうやったら倒せるんだ……。術者本人を叩けばなんとなるか？）

ゆっくりと体勢を整えながら謙介は魔女狩りの王を凝視する。

少し時間を空けてから謙介は口を開いた。

「目には目を、歯には歯を、って言うよな。んじゃ炎には炎ってか？」

謙介は能力を使い、右拳に炎を纏わせた。

そして、

「うおおおおおおお！！」

魔女狩りの王と向かい合い、ただただ真正面から炎を纏った右拳を魔女狩りの王の胸元にブチ込んだ。

すると、空気の入った風船を針で刺して割るかのように、いとも簡単に魔女狩りの王は四方八方へと飛び散った。

思ったよりも簡単に決着がついたので、さっきのを生み出したステ

イルよりも壊した本人の方が驚きを隠せずにいた。

「えーと、ステイルだったか。この程度なのか？」

「……君の力を舐めていたようだね。でも、一つ忠告しておくよ。
まだ終わってない、……イノケンティウス魔女狩りの王ッ！」

ステイルの顔には想定内だから余裕という文字が浮かんでいる。

「……？ さっきのやつは俺が今倒した——」

「グウウォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

話しかけている途中の謙介を遮るように、魔女狩りの王は背後で叫び声を上げた。

「ッ!？」

後ろへ振り向いたときにはすでに魔女狩りの王が右腕を上げ、攻撃体勢に入っていた。

「クッ!!」

体を限界まで捻り、ギリギリのところまで魔女狩りの王の攻撃を避けるが、その攻撃はそのまま地面へ繰り出され、直撃し、地面が欠けた破片を含んだ衝撃波が炸裂した。

「……ッ!!」

受けたダメージの文句を言う暇もなく、謙介の体は数メートルほど

吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「痛えよ、ちくしょう……」

荒くなっている呼吸を無理矢理大人しくさせながら、頭をボリボリと搔く謙介。

（……なんで俺こんなことしてんだろ。はぁ………、ん？）

目を閉じて、ため息をついていると、地面についている右手に何かが触れていることに気付いた。

（ゲーセンのコイン？）

少しの時間考え込んだあと、謙介はニマツと笑みをこぼすとゆっくりと立ち上がり、尻のホコリを何回か払ってから魔女狩りの王をしっかりと見据えた。

「やったことはねえけど、原理は分かるからなんとかなるだろ……」

謙介の呟きにステイルはいちいち反応せず、魔女狩りの王に指示を送る。

それに対して謙介は、さっき掴んだコインを親指の指先で弾くような位置に持ってくる。

まるでそれは、学園都市第三位の御坂美琴がしていた『レールガン超電磁砲』と似ていた。いや、見た目はまったく違って一緒だった。

「おい、ステイル！ 一応言っとく。伏せた方が身のためだぞ」

謙介の助言を信じたのか、身の危険を察知したのか分からないが、ステイルは謙介の言う通りにすぐに伏せた。

そして、

ドゴオオオオオオン、という音とともに勢いよくコインが弾き出された。

「ゲホゲホ……ものすごい粉塵だな。でも思ったより上手くいったみたいだ」

手をパタパタと仰ぎ粉塵を飛ばす素振りを見せる。それから前方の粉塵に映っている人の影をしっかりと見定め、前へと歩き始めた。

「くッ、土御門のやつ……聞いてないぞ、あんなの」

ステイルは辺りの状況を確認しながらゆっくりと体勢を立て直す。しかし、その行動に移すまでに時間をかけすぎた。

「終わり……みたいだな」

しゃがんだ状態のステイルの目の前まで謙介は間合いを詰めていた。

「くッ……、インケンテイウス魔女狩りの王ッ！！」

ステイルは慌てて地面を蹴り、背後へ飛んで距離をあける。そして魔女狩りの王を呼んだ。

しかし少し経っても魔女狩りの王は現れない。それどころか、まったく何かが起こりそうな気配すらなかった。

「……………」

ステイルはいつこうに魔女狩りの王が現れないことに気づき、答えを求めるため謙介を睨んだ。

「さっきのカードごとぶっ飛ばしてやったよ。それじゃあもう再生はできねえだろ？」

「……なぜルーンの特性を……いや」

一度言葉を切り、少し落ち着きを取り戻してから、ステイルはあえて真っ正面から思ったことを質問する。

「君はいつたい何者なんだ？」

しかし謙介はステイルの問いには答えず、まっすぐステイルの方向へ一歩、また一歩とゆっくり歩を進め、確実に距離を縮めていく。

そして二人の距離が1メートルを切ったとき、謙介の口が開いた。

「俺が何者でも別にいいだろ？ てかちょっとイライラしてるんだよ。いきなりすぎて……でも」

一度言葉を切って、

「一発だ。一発で許してやる。それで全部チャラにしてやるよ」

右拳に力を込める。

「うおおおおおおおおおおお！！」

静まり返った地下街に謙介の声が響く。そして、右拳をおもいつきり振りかぶり、ステイルの顔面に向けて放つ。

しかし、謙介の拳がステイルに届くことはなかった。

「なッ！？　だ、誰だ？」

謙介の拳は振りかぶったところで誰かに押さえられ、それを謙介が確認しようと振り返った。

だが、確認するよりも早くにステイルが答えた。

「土御門……」

「え？　な、土御門ッ！？」

ステイルの言葉通り、振り返るとそこには同じクラスの結構仲の良かったりする友達、土御門がいた。

「この辺にしといてくれにゃー、峯やん。ステイルもこれで分かっただろ？　俺達で測れる器じゃないってことが。それにこんな姿、あの子に見せたくないだろ？」

土御門は親指で後ろを指差す。

尻餅をついていたステイルは土御門が指差す方向を見た途端、すぐに立ち上がり、謙介に背を向けて歩き始めた。

「……おい。ステイル、なにも言うことねえのかよ」

謙介はステイルを呼び止めて言う。

それに対し、ステイルは静かに一度立ち止まり、背を向けたまま、

「彼女になにかあった僕がら許さない」

と一言だけ残してまた歩き出した。

「……はい？」

理解はできなかった。だが、すぐに彼女とは誰だか分かったような気がする。

さっき土御門が指差していた方向を見ると、遠くから小走りしているインデックスの姿が見えたからだ。

「峯さん、今日のところはこの辺にしとくにゃー。後日改めてちゃんと話すぜよ」

土御門もそう言い残し、ステイルが行った方向へと走っていく。

「え？　ちょっと待てよ！　……何が何だか意味わかんねえ」

謙介は走っていく土御門を見ながらその場で頭をボリボリと掻きむしる。

「けんすけっ！」

「よっ、悪いな遅くなって」

背後からのインデックスの呼びに謙介は振り向いて、右手を出して軽い感じで答える。

「別にいいんだよ。それよりもこの辺で魔じゅ……じゃなかった。変な力、そう……例えば星が書かれたカードを使っ」

「いや、俺トイレに行ってたただけだぞ？ 別に誰とも会ってねえよ」

インデックスを遮って謙介はさらっと答えた。あまりに自然な感じで答えたので、インデックスは疑いさえしなかった。

気付けば辺りに人氣が戻っていたこともプラスに働いたのだろう。

「さあ、そろそろ当麻と合流の時間だし行こうぜ」

頭の後ろで手を組みながら謙介は先に歩き始めた。

「え、あ……ちょっと待ってよ、けんすけっ」

後から謙介を追いかけるインデックス。

謙介は地下街の天井を見上げ、今にも切れそうな電球を見ながら、

「……魔術ねえ」

ボソッと呟いた。

「なんか言ったけんすけ？」

追いついたインデックスが謙介の顔色を見ながら言う。

「いんや」

謙介は適当に返事をする。

少し歩いたあとインデックスは何かを思い出したかのように口を開いた。

「あ……けんすけ、お腹すいたかも。とうまと合流する前にどっかで食べていけない？」

「……………」

（どっかで腹を満たしてから当麻と合流して昼飯を食べに行く……と？）

謙介は声には出さずに心の中にとどめて、変わりにこう呟いた。

「ほんと、誰かの不幸が移っちゃったよ」

謙介とインデックスは並んで上条との待ち合わせ場所まで……の前に、少し先にあるファーストフード店を目指して歩き続ける。

「……遅いッ！　　いったい何やってるのよ、あの二人ッ！」

電撃を四方へ飛ばしながら文句を言う学園都市第三位の御坂美琴。

謙介とインデックスが姿を消してから、すでに30分が過ぎようとしていた。

「覚えときなさいよ！　　次会ったときは容赦しないんだから」

美琴は右手に持つプリクラに写っている謙介に向けて言い放つ。

そんな彼女の左手には開いたままの携帯電話が握られている。

その携帯の待ち受け画面には、少し撮ったばかりの三人の画像が映し出されていた。

第二章『禁書目録』後編（後書き）

題名は『禁書目録』です。

でもインデックスほとんど活躍しません（笑）

予定じゃ一緒にどっかの魔術師と戦おうとか思ってたんですけど、急ぎよステイルさんを出してインデックスの出番をなくしました（汗）

能力の説明とか、色々もつと早い段階に書かなければダメなんでしょうが、まだ出てきません。

どうしてもこれだけは教えてくれ、と言うものがありましたら感想でお願いします。

できる限り答えるので。

これからどうかよろしくおねがいします！

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2126j/>

とある魔術と科学の平行ワールド

2011年4月15日00時19分発行